広州・深圳旅行記　（２０１９年４月２６日～３０日）

ここ１０年アジア世界遺産巡りをしている。具体的には①西安、②ヤンゴン、③上海・杭州、④プノンペン、⑤マニラ、⑥バンコク、⑦上海・南京、⑧哈爾濱・長春、⑨ウラジオストクなどを訪れた。今回は中国南部の「広州」と経済特区として目覚ましい発展を遂げた「深圳」を訪問した。写真は広州タワーを珠江クルーズから撮ったもの。

（為替レート元＝１６．５円）

４月２６日（金）曇り

８：５０発ＪＡＬに乗るべく横浜駅から京急を利用し羽田空港に７時前に着いた。手荷物だけなので出国手続きはスムーズであった。羽田空港からの出国検査は機械だった。

さて飛行時間４時間半で、１２：３０に広州国際空港に到着。真新しい巨大空港での入国手続きはまず自動顔認証機械で顔と両手の指紋を取られた。その後入国管理官による審査もスムーズだった。２年前の哈爾浜空港での審査手続きとは格段の違いである。またセキュリティチェックもスムーズであった。（但し帰国の際の手荷物検査は極めて厳しかった。手荷物鞄を２度も開示させられた。ソニーのウオークマンが原因だった）

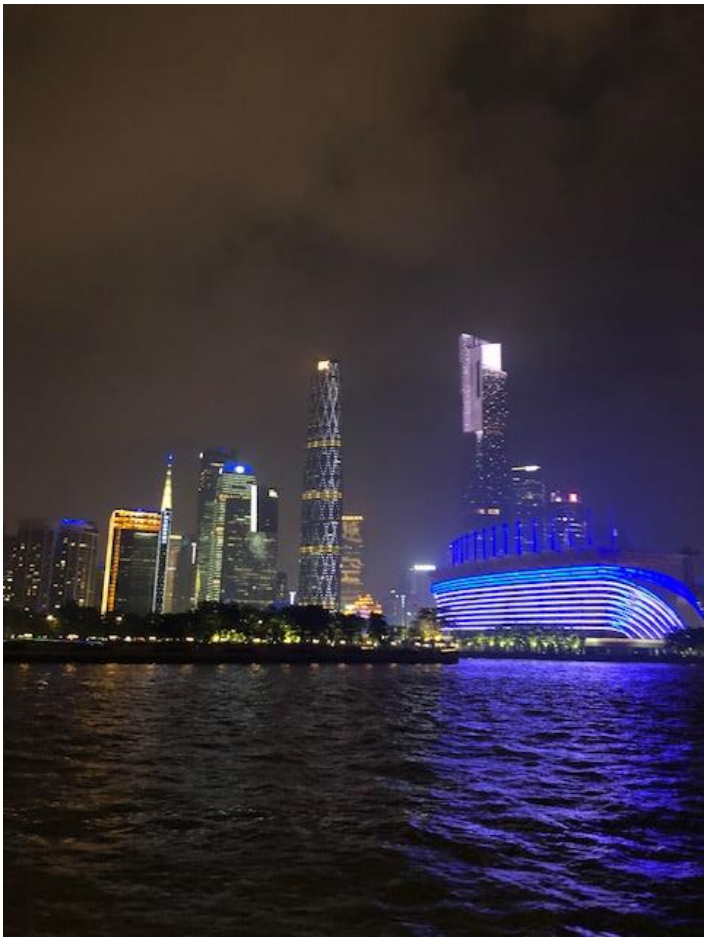
空港を出てＡＴＭを探した。しかし見つけたＡＴＭは現地ローカル銀行だったので外貨両替は不可だった。その為日本紙幣で人民元に交換した。

次に地下鉄を利用すべく地下鉄駅舎に向かったが、ここで大変苦労した。両替した紙幣の最少額は２０元だったが、自動切符発券機が作動しなかった。右往左往していたところ、見かねた中国人青年が１０元以下でないと作動しないと教えてくれた。それで紙幣を小口に両替してやっと購入出来た。

さて地下鉄 3 号線から 2 号線を乗り継いで目的地の「越秀公園駅」に着いたのは 14 時頃だった。因みに乗車時間４０分でチケット代金は 6 元だった。公共交通料金は極めて安い。

宿泊先の中国大酒店（Ｃｈｉｎａ　Ｈｏｔｅｌ）はマリオット系ホテルだった。そしてまずホテル内のＡＴＭで両替を済ませた。ＷＩＦＩ完備だったので一応

データ通信に問題はなかった。しかし中国ではＷＩＦＩ接続出来ても、Ｌｉｎｅとヤフーは部分的で完全ではない。データが重い画像などは不可だ。グーグルとフェーズブックは完全に不可だ。また市内でＷＩＦＩの通信可の場所は限定されているのでドコモの海外データ通信サービスを利用した。１時間割か１日割でデータ通信が利用可能だ。このお蔭で旅行中日本の家族とＬｉｎｅが通じたのは嬉しかった。尚友人がこの中国旅行の為にポケットトーク（自動翻訳機）を持参したが、市内では殆ど機能しなかった。自動翻訳機はデータ通信サービスが機能していること不可欠だ。



午後５時に珠江クルーズ巡りを楽しむべく、「海珠広場」に向かった。船は７時発の 90 分コース（値段 108 元）であった。船からの広州の景色は絶景だった。（写真ご参照）

珠江はＰｅａｒｌ　Ｒｉｖｅｒの名前の通り美しい大河だが、現在は川辺に林立するビル群とその壁面のイルミネーションの織り成す画像の美しさがより評判だ。広州を観光する人々の半数が珠江クルーズを利用すると聞いた。今や広州観光の名物といえよう。

４月２７日（土）曇りのち雨

朝食はホテル内のビュッフェで取った。5 星ホテル相応の豪華な内容であった。

午前９時過ぎ、まず広州南駅に向かった。２９日の深圳行き往復新幹線（中国では高鉄と略称）チケットを購入するのが目的だ。

高速鉄道は日本のように簡単に乗れないことは２年前の哈爾浜旅行で体験済みだ。前回は日本でネット予約して現地でチケットを取得した。しかし列車はガラガラだったので今回は予約なしで広州に来た。しかし広州深圳の経済発展振りで万一満席のことを想定し、事前購入すべきと判断した。高鉄停車駅との乗り継ぎ駅である広州南駅まで越秀公園駅から地下鉄２号線に乗って３０分で着いた。ほぼ広州市内を北から南に縦断した。

さて広州南駅でのチケット購入は予想通り簡単ではなかった。まずチケット売り場が中々見つからなかった。大多数の中国人客はスマホを自動発券機に触れて取得していた。

中国人の方法は参考にならなかった。やっと見つけたチケット売り場は駅舎の外れにあって相当混雑していた（写真参照）。

その行列に並ぶこと１５分で窓口に着いた。ここでは友人の筆談が奏功して希望する日時の列車を指定出来た。しかしＶＩＳＡカードで払おうとしたところ拒絶された。キャシュかスマホ決済のみ可とのことだ。その対応には少し驚いた。

因みにスマホ決済は広州地区ではウイチャット（ティンセント系）が圧倒的だ。揚子江以北の北部地域はアリペイ（アリババ系）が主流とのことだ。

このあとメトロで「沙面」に向かった。しかし「黄沙駅」に着いたところ、大雨だった。ランチで１時間待ったが雨が止まないのでホテルに戻った。

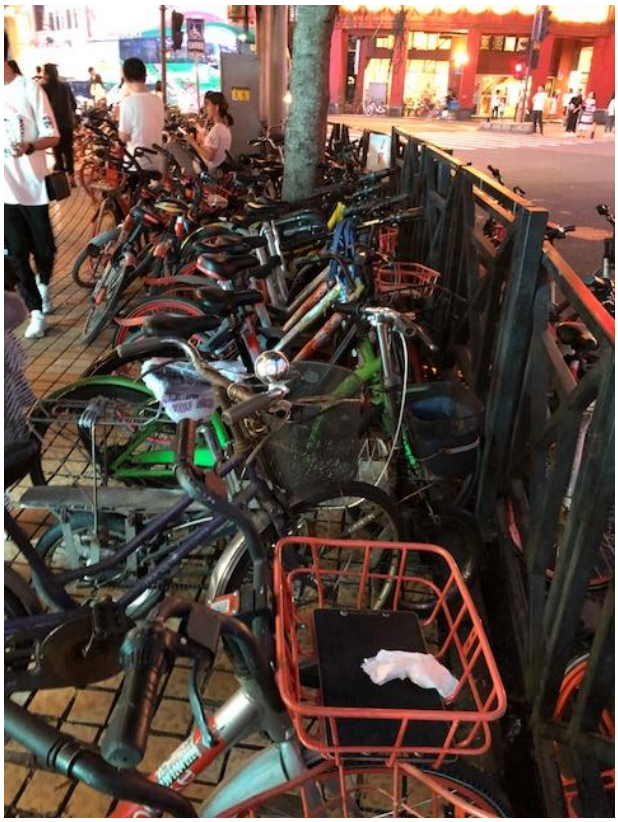
夕方雨が小降りになったので「西関大屋」地区にタクシーで行った。ホテルからのメータータクシーは余りなく、行先までの料金を交渉する白タクに乗った。道路は渋滞なくスムーズだった。西関大屋の通りにはオブジェが多数あった（写真参照）。その晩はホテル近くの唐辛子で味付けられた広州料理（写真参照）を食べた。

４月２８日（日）曇りのち小雨

午前中は昨日雨で行けなかった「沙面」に向かった。ここは１８４０年のアヘン戦争で勝

利した英国が租界地にした地区だ。香港が英国の領土になるのは５０年以上後のことだ。従って欧風建築物が多く、また面白いオブジェが多数陳列された街並みだった。この風景はシンガポール市街と同じ趣味のように感じた。（写真ご参照）

この地区の入口の橋の麓に乗り捨て自由な自転車が多数放置されていた。そして街からバイクが殆ど消えていた。



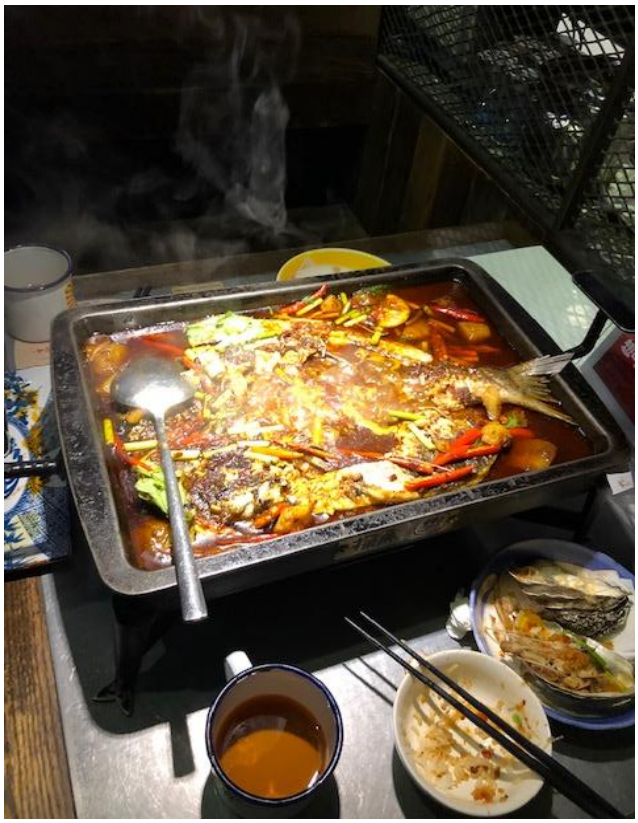
次に「西関大屋」地区の西側を散歩した。広州は始皇帝が統一したＢＣ２４０年頃から存在しており、南越王が支配していた。三国志時代には諸葛孔明の南蛮征伐や、明末清初時代には呉三桂と康熙帝の三藩の乱の舞台にもなった。そして２０世紀初頭、孫文の武装蜂起など歴史的遺産も多い。

長寿路からさらに西に歩くこと１時間で「嘉湾博物館」に着いたが、中華民国建国に関わった将軍宅も観光名所になっていた。この地区は市民の散歩エリアとしても整備され、公共トイレも完備していた。

午後は広州タワーを見るべく地下鉄で「珠江新城駅」に向かった。そこは２０１０年の第１６回アジア競技大会の会場になった場所だそうだ。その周辺には広州博物館新館、オペラハウス、図書館、大型ショッピングモール、金融中心のビル群（写真参照）が林立していた。

珠江の南側には広州タワー（写真参照）が聳え立っていた。かつて広州タワーは世界１の高さであったが、いまは第７位だ。第４位が深センにある平安金融センターだ（２９日訪問予定）。ただこの日は霞が掛かっていたので広州タワーには昇らなかった。

ランチは「探魚」というレストランで食した。このレストランは海外も含め２００店舗もあるチェーン店で淡水魚を唐辛子で味付けした鉄板料理が人気だ。（写真参照）



午後は中山記念堂（写真参照）を見学した。広州は１９１０の中華民国建国の父孫文（中山先生）が清と戦闘した舞台だ。記念堂は現在講演と演劇などの会場であるが、幕間に休憩する廊下の壁には、清末から１９４０年までの歴史的写真が展示してあった。記念堂周辺は綺麗な花園が整備されていた。

夕方から北京路を訪問した。北京路は２０世紀に発展したやや古い地区だ。歩行者天国もあり土産物など雑貨衣類なので小売り商店が集積していた。

４月２９日（月）曇りのち晴れ

７時半にホテルを出て広州南駅に向かった。８時過ぎに到着し朝食を駅舎内のＫＦＣで食べた。広州には米国系チェーンレストランが多数存在している。マック、バーガーキング、スタバが目立った。

駅舎は巨大施設で高鉄の乗り場（写真参照）には２０列程の車両が並んでいた。乗車３０分前に待合室で待機し、発車１５分前から乗車可能になる。また深圳～香港間は２０分間隔程度でほぼ満席だった。２年前の哈爾浜～新京間に乗った時は６０分間隔でガラガラだった。

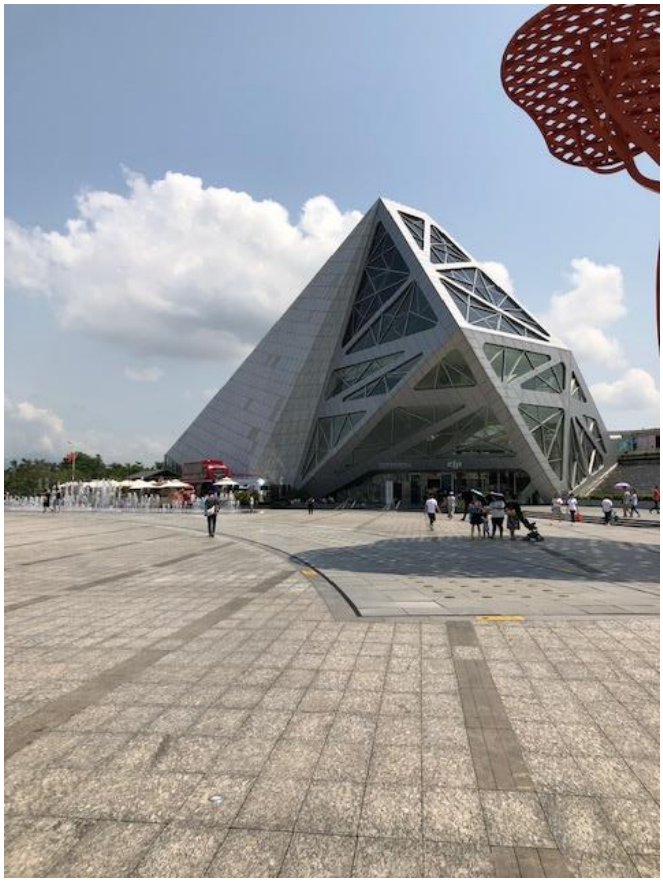
さて８：５６発の高鉄は９：５６に深圳に到着した。ガイドブックでは３５分とあったが６０分かかったのは途中停車したからだ。中国にも「こだま号」と「のぞみ号」があるということが分かった。

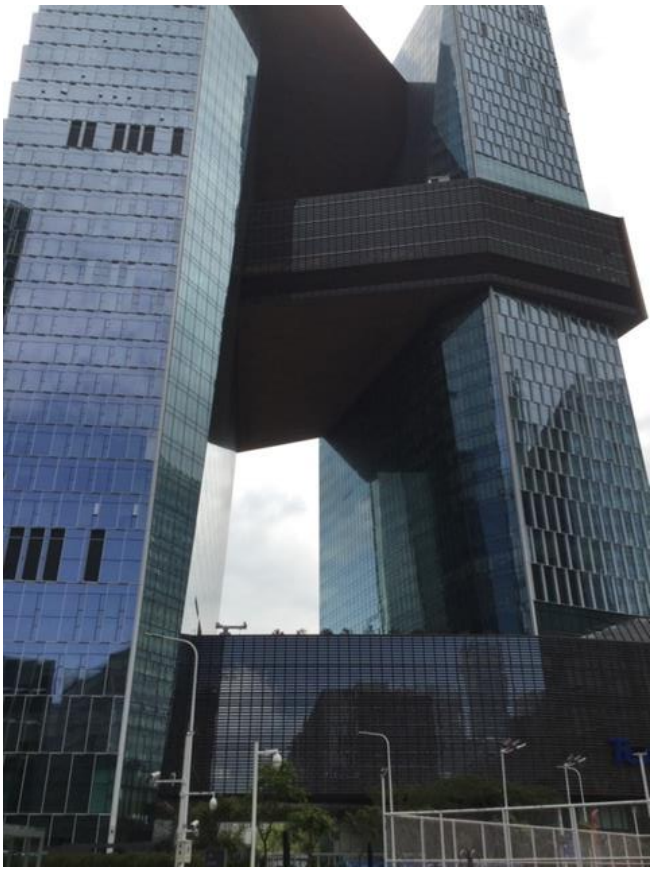
深圳福田駅周辺は金融と地方政府が集積する地区であった。そこから徒歩１０分で三菱ＵＦＪ銀行深圳支店についた。

昼前に支店長を訪問した。ケリープラザ１０階からの眺めは素晴らしかった（写真参照）。支店長から深圳の概要を聞いた後、副支店長と共にランチに行った。広州料理の名物である飲茶を紹介頂いた。

午後はタクシー１５分でドローン製造の世界的企業ＤＪＩに行った。その展示室（写真左）ではデモンストレーションと主要製品が展示されていた（ピラミッド型ビル参照）。ドローンは搭載されたカメラデータを伝送する機器が商品価値の要だ。カメラメーカーとして北欧企業の商品も展示されていた。大型ドローンは農薬散布機能があるとＰＲしていた。

次にティンセント新本社（写真参照）を更にタクシー１５分で訪問した。外から観た本社ビルは威容だった。相当数の観光客がいたが入室は不可だった。警備員がガードしていた。





夕方長瀬産業の知人と落ちあい、「平安金融中心」に昇った。１１６階（５４１メートル）の展望台からの眺めは最高だった。高さは世界第４位だ。３６０度で深圳市街が一望できる。北東側の景色の後方に山林と田圃が見えた。川の向こう側は香港とのことだ。深圳地区はビル群で開発されているが、香港側はまだ開発途上の印象をもった。

（写真参照。右後方が香港地区）

４月３０日（火）　雨のち曇り

午前中に越秀公園を散歩がてら広州博物館と羊の像（写真参照）を観た。中国ホテルから徒歩１５分だ。この公園は市民の憩いの場でもあり、散歩やランニングする人々も多かった。博物館は秦の始皇帝から清末までの市街の変化を最新ＳＧで展示していた。

（その他気づいたこと、見たこと、聴いたこと）

1. キャシュレス社会
   キャシュレス社会とは聞いていたが海外旅行客にキャシュ（紙幣とコイン）は不可欠だ。ただ現地滞在者はスマホ決済（電子マネー）が全てかもしれない。レストランでキャシュ払いを見たことは無かった。しかし個人情報が企業（と国家？）に掌握されていると思うと、一抹の不安感じる。決済情報は消費行動や信用情報と完全にリンクしている。
2. 外国のクレジットカード
   外国のクレジットカードは相当制限されている。外資系ホテルや名門レストランではVISAは通用したが、鉄道会社を始め小売り店舗では不可だった。予めホテル内ATMで両替しておくのが賢明だ。
3. バイクが消えて自転車が多い
   バイクは殆ど車道を走っていない。車道はバスと自動車だけだ。小さな路地と歩道はレンタル自転車が氾濫していた。早朝の駅や公園周辺に放置されている自転車の数は膨大だ。この自転車はスマホでロック解除される仕組みで鎖はない。
4. 地下鉄網の発達
   広州１４路線、深圳 11路線の地下鉄網が整備されていた。これほど早く都市交通機能が整備された例を知らない。東南アジアの中核都市（バンコク、クアラルンプールなど）がやっと地下鉄網の建設を始めている。
5. 空気が綺麗
   空気が綺麗だった。スモッグもなかった。深圳の公共バスとタクシーは全て電気自動車とのことだ。１０年前香港訪問時、空はスモッグで覆われて空気も汚れていた。広州側から飛来する煙が原因との話だった。この１０年で相当環境対策が進んでいるようだ。（冬は石炭火力発電で多少スモッグが出るとのこと）
6. 治安対策の費用
   地下鉄乗車には手荷物の投射検査と身体検査が必要だ。但し検査の後で鞄の中身を開示させられることはなかった。しかし高速鉄道の場合は航空機並みの検査だ。この検査員と設備関連費用は莫大だろう。これは年間20万件を超す暴動や少数民族との軋轢などテロ対策なのであろうか？
7. 高速鉄道チケットは名前入り
   高鉄チケットには名前が記載されていた。国際航空チケットと同じだ。身分証明書（パスポート）を出して購入していたので当然かもしれないが、高鉄は航空機並みの安全対策を講じている。高鉄は時速３００kmで走る。
8. 深圳は30年前30万人の都市だった
   今13百万人の都市だ（ウイクペディア情報）。昔は農漁村だった。経済特区第１号として欧米資本に開放された。外資系銀行も開放され三和銀行と東京銀行が日本では第１号で認可された。日本企業ではOAメーカーが多数進出した。今や電子機器のメッカとなり、ファーウエイ、ティンセント、DJIなど世界企業を多数輩出している。中国のシリコンバレーと呼ばれている。　（2019.5.7 記す）